

ハンディをもつ人の前には、「目に見えない段差」も立ちふさがります。

教育の機会や社会的経験を奪う「見えない段差」、ものごとの決定に参画する機会やコミュニケーションの権利を奪う「見えない段差」……。

それを無くすための努力に、スウェーデンのFUB(知的ハンディのある人々を支援する会)で出会いました。FUBの資料は表と裏に同じ内容が印刷されています。表は知的なハンディのある人にもわかりやすい、L1という文体で書かれたもの(右)、裏は普通のスウェーデン語で書かれたもの(左)です。公用語を二つ持つ国が二通りの公文書を印刷するのと同じ思想です。十二人の理事のうち三人は知的ハンディのある当事者です。会議の一週間前にL1で書かれた資料が届けられ、会議中は説明役がつくのでよく理解でき、堂々と主張できるのでした。

ただそこに座らせてもらうだけの「参加」と、決定に積極的に加わる「参画」は、似て非なるものです。

米・ホフストラ大のフランク・ボウ教授は、八九年来日した時、コミュニケーションのハンディを、こう表現しました。「それは、ガラスの箱の中に住んでいるような気持ちです。人々はすぐそばにいて、近寄ればさわられるほです。けれど、実際は、速く速く離れているのです」

彼は幼い時にかかったハンカで聴力を失いましたが、ギャロレット大で修士号を、ニューヨーク大で博士号をとりました。それが可能だったのは、この二つの大学が手話通訳を用意していたからです。

ボウさんが凄いのは、それを「障害を克服して……」という「美談」に終わらせなかったことでした。

彼はこれを「幸運」ではなく「権利」にしようと考えました。障害をもつアメリカ市民連合(ACCD)をつくって、さまざまな障害団体を結びつけました。そしてついに七三年、リハビリテーション法に「五〇四条」を加えることに成功しました。そこには、こう書かれています。「連邦政府の援助を受けているすべての機関、すべ



知的ハンディのある人にもわかりやすい文章で書かれたもの

# 福祉が変わる 医療が変わる ぶどう社

●朝日新聞読説委員室十大熊由紀子

てのプログラムは、障害によって市民を差別してはならない。差別した時は補助金をカットする」

多くの大学が連邦政府から援助を受けていますから、効果は絶大でした。障害のある学生は手話、点字教材、ノート筆記、介助などのサービスを権利として受けられるようになり、法律や経済の知識を身につけた障害当事者が多数誕生しました。その人たちが、九〇年の「障害をもつアメリカ人法」制定の原動力になりました。

国連は八二年、「障害者に関する世界行動計画」を採択し、八三年からの十年間をこの計画を各国政府が実施するための「国連・障害者の十年」と決めました。スローガン、「完全参加と平等」はボウさんの提案でした。

行動計画には、こう書かれています。「どんなに障害が重い人も同年代の市民と同じ水準の教育を受け、仕事をもち、普通の家に住み、結婚し、旅や芸術やスポーツを楽しみ、さまざまな情報を手に入れ、政策決定に参画する権利がある。障害によってもたらされる不利な結果の究極的責任は、政府にある」

「障害者に迷惑な社会」の責任は政府にある、と言い切ったのです。

これを各国政府に徹底するために、国連は九三年、「障害をもつ人の機会均等に関する基準規則」(48ページ参照)を決議しました。

起草したベント・リングビストさんは、「盲目の名厚生大臣」とスウェーデンの国民に慕われた人です。十五歳で失明。英語、ドイツ語、国語の教師を経験した後にテレビ局ディレクターとなり、八二年には国会議員、八五年から九一年まで厚生大臣をつとめました。障害別にバラバラだった同国の障害者運動を、「万人のための社会」の旗印のもとにまとめあげた人物でもあります。

国連の特別報告官に選ばれた彼は、各国の政府に、「基準規則という物差しで自国を評価してください」と求めました。同時に、障害当事者団体にも同じ書簡を送って、政府回答の信憑性も評価しようと企てています。さすがです。



普通のスウェーデン語で書かれたもの